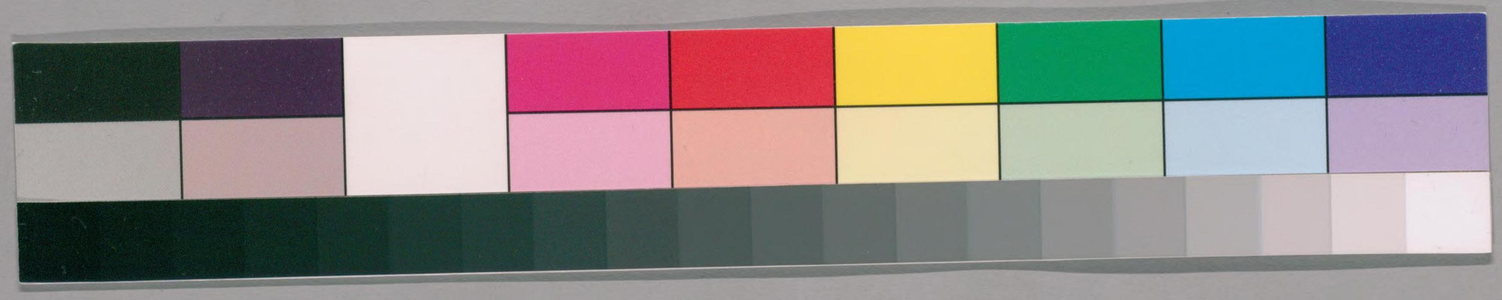

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

物見塚記

右京坊一鼠編

863-71

和露文庫

物見塚記

東都日之下社里なる寺院の本行寺といふの塚あり周廻五間高さ七尺頂に一株の松を栽て十とせのあまりも乃ちかれぬれば塚もくづれ断岩こゝかしこ東南小の眺望い須弥の金輪なりまわりを彼大勝の雲襲ころころを優游よあそびもる社地なり筑波大人の碑文み道灌丘ともあそ

江戸の地誌よい物見塚と出きわさるは後人の
多量るうらつけて名たまるもの主人
名ハ植雅字ハ日植なる鵬ハ境略こひ又風狂
して知足坊の一瓢ざ称ざ許由の指るを
学ひ清貧を顔回よなるもむるをよて
名もまの巣略そあねの乾よ近く東叡山戒應
寺を南よあひて陵まての都嚴の境よ出て
福名を甘一耳目の閑如好するの云やむのし

く灌ぐ江戸の城をちーあ張ぐる此をよ
その足ぬ梅なよきくかそれ舟百首
江戸哥合慕京集ちる世の人のまるそ
て文武うらくあ歯干戈のやまいむさ
聖ら月をまの免むちる日陸を移の甚
江一字ぬ精多ぐまの下て離一をなつそく
土田塵世の墓をきらく隋柳楚妻ぐるのて
学ぶあ走ぬ陸うぐぬよ乃

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

世にふるも嵐蘭の情なる
ぬ泥にこそなりてあらめやも
さゝのわかばやゝ物あらそふ
恐ひ根笹よ杖をわくるも
膳の先よ箱根山を望て遊水の捨てく亀子
雛子の膝を切る古くふるを
よし黒しや二百の旭八幡ぐ兎みくわかく
玉藻刈くむま古の法の記ハ万葉集の古ゝ

物見塚
塚もそゝろ塚より糞の
保四の二年ほの冬記孔松
帆影あよこもれ鴻臺の及照る眸をさく
ムおし東ふ巳ぬまちの塔雲もすゝ
仏房の併ものよ真気山夕雲迄く物
今戸は瓦やく業は小野ゝ炭焼赤穂の時竈も
私も巳ぬ宮ゝよ幸ゝ人のと辰ゝむその烟ち
築節のまゝ北沼田の居尾久のまゝ無量ち

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

[illegible]晩鐘[illegible]旧[illegible]のもに[illegible]御[illegible]坂の鶯
[illegible]夜[illegible]啼[illegible]る[illegible]面魂水[illegible]
眠[illegible]る[illegible]仏[illegible]姉[illegible]
閑古[illegible]う[illegible]を[illegible]
[illegible]蘆火[illegible]水鶏[illegible]
谷[illegible]苗[illegible]比[illegible]
訊す[illegible]田畑[illegible]車[illegible]練[illegible]
[illegible]て児女[illegible]

雲嶽よ[illegible]け[illegible]蛙[illegible]植田[illegible]沸天地[illegible]蝉[illegible]
無人[illegible]る[illegible]肘[illegible]
[illegible]ね[illegible]松風[illegible]
箪一[illegible]焦熬[illegible]
[illegible]て[illegible]
坂本[illegible]王[illegible]
[illegible]
更[illegible]

秋の月いうもさらなり折ふしの
光なきの折くもよりも速のみ業なの祝ひ
不二なこぬうもちてお生ものの年月をかそへ至い
筥なの松こそいつしの霜のきこえて
吋面の筆笠小宝のまけまもこれ水鄉画村の
物よい鳥静の景なまこれ叢村の霜まるた
寺観の屋根をぬ一筋ここ河畳を雪まちて
尾れれのまよて筆まものまよい此上のみとものや

あるこまま雑波の芦ねつけさるた枯てれ墨画の不
易まる風情あまこ舟青のれ数少のをきこくれ
湖畔の景骨なまこたる探巡し筆をくいへ貞
室も天空を掛るもんとを味当の独坐のらく
四時の眺望なおへた此物見塚よ媚をつくて
さに瀟湘洞庭もあつからん煤の暁雪の名も
筆まてくまの造化ん大きもと成ぬまい
志つのに寺ね硯をりませんまる春の

眼下正月猶寒梅未
了春色歸
文化丁卯幸未

物見塚一墨誌

書陵部

道灌丘碑文

筑波　石正猗撰

里曰日暮寺曰本行在東都郭北寺有丘曰道灌丘奚名道灌太田氏之祊乎里人思太田氏也里人奚思太田氏無忘其惠也寺西北有山亦曰道灌蓋山則太田氏保鄣之遺而丘乃其斥候臺之址也故無丘唯址耳有之敘自里人之思太田氏也

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

ガラス使用

自有丘二百有餘年于今矣相傳昔太田
氏既亾里人過其墟盡為禾黍閔壞臺
址彷徨不忍去而丘其址焉故丘與山皆
用其號名矣寺舊在谷中里太田氏羣屏
攝之所在而道灌之曾孫今懸河庑世世
相承以守其祀也寺與群屏攝遷於斯里
者繇寶永中也遷則得斯丘蓋不幾得矣
可不謂奇也稽諸譜牒太田氏名持資官
左衛門大夫道灌其諱源光祿賴政十世
孫父道真名資清以永享四年壬子生道
灌於相州扇谷少恢廓有大志博涉經史
善兵法明畫策是時天下戰爭諸國瓜裂
各擾其黨迭為廢齒道真道灌二世屬管
領上杉氏府中推道灌贍智豪邁有文武
之材專委兵機之要長祿二年戊寅城武
州江戶焉而鎮之正其封壘險其走集每

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71
ガラス使用

與鄰國戰利在以寡勝衆兩毛二總諸城
聞風震慴降者不絶大半為上杉氏之有
者皆其力也既而州界寧肅百姓悦服道
灌增脩德信以懷初附至敵國諸將皆謂
彼專為德我專為暴是不戰而自服也寛
正中道灌入京王人采道灌所詠國風奏
御
天子乃賜御製歌一章以褒揚之迄
于今世所傳稱其人英武而文者可知也
寛延三年庚午寺主僧日忠與懸河大夫
古屋孝長四宮成煥圖樹石于丘上俾余
屬厥事石子曰昔灌公之德及武州人豈
猶荊人之思羊舒子乎不然何至斯里之
人亦無忘其惠丘其址焉以貽諸後世也
吾聞之羊舒子亦無子襄陽百姓於其平
生游憩之所建廟立碑歲時享祀望其碑

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

者靡不墮淚唯灌公者異於此　國初時
其五世孫資宗始稟茅土之封食邑五萬
石寔為道顯公繇顯公又四世于今瓜瓞
緜緜奕葉昌阜其斯為盛矣方今懸河君
大夫以歲時朝東則春秋齊肅有事群屏
攝遂登斯丘望之必有若觀當其時褊裨
分隊憀勒弋馬旍旗繽紛白羽若月赤羽
如日辟司徒銳司徒各慎其守猛士發揚
踊躍用兵乃皆延頸企踵以待斧候之舉
燧者焉爾於是乎君大夫慨然無念爾祖
聿脩厥德將慎其四竟完其守備訓有司
以義施小民以惠而光昭令名以示子孫
無忘監於斯乎然後知里人丘其址焉寺
主碑其丘焉皆有由也夫

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

一瓢上人の新宮、俳士坂あそばし

めむめくなりごそわまきゃまつ一枚

さおのまつに雪をほそむ

友ちどもと柱そりやきー

木下川の浪をやうす茄子この形

坂の豆やつくる豆腐も冰

春風や小坂のもりに茶うる

成美

夯貨

百之

鹿太

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

戎人ろ〳〵と宝山の月　袁丁

立ながらにまりてやらん猫柱鼻　舟雅

学ばたや蝿ろかなけく年の矣　守静

いくまひるを風乃吹しきくのそ　曲阿

をとさ江火をるよろそ初水鶏　永矢

ほろきれゝろ月柿ろ系　心非

名刹をめるを九仙柱ふ奉　几魯

節季候の永柏杉教くつまる

懐ふ島我をを春や隅田川　朶年

時雨ろ〳〵や地蔵の供よ丹波山　一峨

木ろ〳〵や地蔵の堵ば盛ろる　龜山

杉風のふ口へまり我芒の形　兎一　少年

ゆくとしや大盃の手ル　浙江　十人

ぬりこむ教の残漸やり　巣兆

宝永日乃理山ふ仰ろる心の系　老阿

風雅の野狐心作麿生

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

穂芒やうねりおよぶも果のあれ　　煮崎

ぬくくと親の居あけを冬籠　　梅壽

空つきろ口をそくかす蓮のも　　周化

山もまや蟹やく哀なり中にして　　一阿

起ふしや哀ものそひ波のの玉　　諫圃

なつくる波にうつる月もとそ

隆達の節に山けくもすき哉　　仙骨

末枯をふむ時おく板うち　　素岳

菜のそれ乃これやうや雪の海　　麥宇

人寒や蔽の中より銀河　　國村

みんつけて春のあしよ麦の穂　　宵盧

仇先よりゆを社たくや納豆汁　　米堂

やくくに悩病よなる月乃うへ　　一蕙

きの月小蒜おものそうの氣　　久藏

知足坊のこゝろおもふかまるきそ

炭そくくあをも杜鳥む苔のうへ　　道彦

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

名月やそれての後乃事ども
うつそりとそつや土用の第一苗　午心
洲まいを食の銭しのつさこの邨　理峨
夕霧童ハ二日夜こ　少年　徐柳
　　蕎ハ画のやうこ小海ふかいつら　李臺
雉子雷や不二を筑波ル窓の下　芳洲
さみしやい小云男ま孝いやう　萬里
木ぶきやものく小家のむら〳〵　斗月

おもき春社月と花山ふこれ　胡準
焼野ともいまく四日の名もなき　碩布
造化なく称いすり大根汁　采羽
あるちもの鹿たまくきつ雪のそ　車両

心の弱い放馬のうなゐ

青くやかをするたのむろ　このつこ
立向ふ来てゐてまれそさくい　可良久
麦蒔うせう出てやこ日の月　春成

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

関や坂辛き月隈る松の雪　護物

学社赤やちのこ紙入れて　春蟻

山をめくもちくら隠して春の水　宗瑞

くるけしるあめのかぐや春の風　遠志

春燈を並ぶ法書や春の雨　國歩

我火桶美向よりも考もむ　嵐墨

すいくと仰の沢おなどり来　五渡

門ろう大工ありまる垂絆これ

小倉うけ達磨ルれをこみたんな　民玉

降雪の枯木をつむもしやきり　九秋

坂口やすみまにうまも軒の雨　燕市

盆の月山社うよいよ秋くら　ノ旦

　寄ゆう雨こうみの笑しい

犬吼て猫吟て秋の月　文勝（九才）

山茶花や机ルろくなるも　雨聲

苗村よ妻を見くはく雨の降　仙菓

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

なの山寺をおしまゐ住侘ん　完來

うちにくり行基ちさんの小菜畠　任只

しるめ松いかの沢もし海と山　省已

ぐりあつめても夕暮よ秋の忡　寥松

　　宍もる膳うちけるん

謎穂一て蒼雉のうらと心ひくる　藍水

菽入やうめまるのもちり弐申　和扇

かつくと足許もきりく枯奔　春樹

梅うちにあてゝの蚋の蔭の塁　亞然

蛤乃口ふりをなす新おろし　蛙足

行くれとなく駈よるや小屋　也好

羽打うへの鐘と恵りほく夕ゝみ　一茶

甲斐國信玄の旧趾にて

菊いろ〳〵咲きくと成て日の細き

身の秋や紙帳かうめい薬をして虫

夕ゝや蕪苑よう新山乃新

行脚　幽嘯

、　巣也

、　閑齋

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

ガラス使用

四月廿八日於隨齋亭

ほとゝぎす鳴やとおもふ一瓢
庭も夢つゐも教となりそ成美
橋次の弥〳〵にまいる柳笠 瓢
日を盛つもる〳〵ての鞠音 美
咲ちる月夜もちらく夢まのを 瓢
むやくとして川舟なれ 美

秋の人徒ものくらしはの 瓢
咲て名をよぶ隣の居風呂 美
まやこもる〳〵地ふ発句なく 瓢
掃ともく〳〵ほこりまふん 美
酔の来る秋忙て降ふん 瓢
ひくきに二階下人をかく 美
十六夜も股のうちをあやうに 瓢
つゝてうそ霧の宇治橋 美

名振舞ヲ稲乃匂ヲほのぐし

行そよいそ春風ぞわりある

一拍子めけるの迎春乃のち

ゆくもまもなうの林ゑ菜ぐさく

支觸、のあそなよ春ルひろもて

家鴨打ひるむ宿かくせ青

やどろそよそかくせ菖蒲方

高乃あまもくそまゑすれるの

甕乃雨乱ゑ神祇うもんん

さもまもうにう答ほし

松風ゑ酒のむあほをせて

むゑいうう寺ゑ板安

一ううくうやとやう

鬼ヲ注勢ま順歴ゑ

麦餅のかくひつなる

秋ゑ惜むいふる

美 瓢 美 瓢 美 瓢 美 瓢 美 瓢 、 瓢

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

枝をみち幣するむすめのそで
わさらぬ玉川
てもちんせうくするの姉しそて
三月るへ人のあるの
鬢るを始の小をもん
るせ給くと田の一面もり

各十八句

美
瓢
美
瓢
美

山墅

春の海ぱおもまてにおとひる
まちきや光の世もるる雲と水
ちの生きせやくなり春の朝
まてなをや田螺の山て
花まあそひ水ふたもかた
月夜のあるはなるを雪のその山
杜の紙烟こて足

蒼虬
瓦全
丈左
茂良
華朗
千崖

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

夜数月いざこゝろの翁　岱李

信坂こえ水も湧色き菓うま　土卯

数寄風方角となりくり　月居

摂津

天晴れ一夢涼し月社お　長齋

故屋乃月このしたまよろ小　魯隠

鶏の吟句こゝろせ菓葉　尺艾

妙んきの道を菓社集小　万和

あらくと雨のもこもは清き　奇淵

まそとすまやそうの　釣翁

玄のの屋負のまれ深菓う　麥太

おまてさりくなり夏花の華　米彦

橘社まもたしな月夜の　井眉

正月ふくいの山乃家　八千坊

玄菊を撓をなちの後の　稲丸

元日なるとおこ二日う

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

不動寺にて人々と霧むや畠道　桐栖

雲とのみ見てをおもむる菜うら　一草

　森のうら〳〵不いつくまあれ

野の梅のかをそゝめいなり宮　瓜坊

詠そめの初てのもの哥の衣　三津人

とゞ忘れて居る鈴やさきの雨　竹齋

稲妻や原よりくらの見るのこと　友國

ちるのつゝじ盗ていおくれ菊の秋　升六

大和

うろゆく不二六壱くて菊のまち　空阿

船呂のやうとまの着る服をきる寒　拾葉

つゐ摘て出てゝも川越寒畑哉　和山

河内

すゝきの穴うかゝ地蔵の御　来耕

都のつゝを上るさゝやの　八之

晴天城きつゆの帰や雨古寺　蓬宇

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

和泉

一ときの夢ごゝち哉や蟋蟀　喜齋

もや夏といさめて月ぞ冷まじき　句竜

灌佛の湯よ抗ふ髪の癖　荷風

尾張

降雨をかなしむ人の月　士朗

まの皺とさすもをかの青麻哉　桂五

垣ひなく動ろふものよ蜻蛉の夢　天老

名月やもろ〳〵妙な松の形　梅間

湖やきら〳〵帝山はの雪　竹有

さゝなみや蛙や膳不ハ一ト重町　少汝

百年も活てそゝろの月　大阜

山里や蘐の蔓ルゝめぐれる　五雄

さすがに年のさきしものゝ

来ませてもろ〳〵正月のかゝる　黄山

松風やいろ〳〵の菴ハ月のもれ　鹿野

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

日ぐもやうさまの耳の動く時　搓雀

世乃人をうらみにて雪の月　岳輅

伊勢

木がらしや桜松原のえりまて　椿堂

白い花さくや夜雪ふる冬もの　丘高

待ものの有ま申すを蕎麦のも　推已

ふ波へのきさいもまつすゝて

篠波津の古も奏都や路の雲　草翠

苔のそれ笑や十やもの旅草雞　孔阜

鴈鴨社多ものよ生命の妻日りを　為徳

母のおもかけ

蒹乃やにる月日の影　路白

志摩

うらもかへらぬのくもる浦師の宿　紺山

伊賀

もちもて尻ふる暗の雲この孔　清江

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

乙鳥のうちうち者ら柱笠　猪莱

大佛殿扉よ二月のあくる日　羅十

遠江

大井河とふ詞書あまて夜半の月　嵐荘

襟もとにうめ香ひらくや梅の花　露喬

巣のもの〻揃ふやうやき夜の月　蓼秋

采地なれはまつ見る秋の　桑克

白梅や宝は笥焚く夜の雨　緒序

揚雲雀日もの〻八舟へおちさゝれ　俤月

達ヶ忌や幾日一筋茶の煙　露琰

うめの花第よう咲てもゆる也　其白

駿河

帰雁翼ほす雲にうそうそり

戸をたゝいて妻呼ぶ鹿の声　沾吏

伊豆　郎哉

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

飛ぎや笠好事もうる合　画牛

雉子なくやものわて九月の暈　雨吟

猪乃ほくく行やの素　素石

三河

名月なれり山家の栗、の好

ものう事を見て九帰るこの菓子哉　卓池

さるなき浮世なりくと無なの涙をおとす

山ほとゝぎす過るを麦のある月の夜　秋峯

伐号

松九のやあい帰なむ古今　普天

秋ふかう月吹て山のうへ　白秋

風や人住ずもあらん新法師　佳雄

むさゝびあるあれりと栞よりの　楳堂

甲斐

一銭の茶よりのくり　可都里

山ぶや雑子打帰をり八重葛　有斐

ちるまでよいほもちるやそ畠　漫々

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

ガラス使用

風まちをる舟のあるもの

蝸舎さびたる物ずき

蓼ざくら一ト木あるもあはれ

荻の声おもい峡坦もちかく

炉ふさぎ日のあるうち東の窓の後の名

相摸

川やろさかくするうちろ

帷子を着ずはなくもまろ

蟹守

重行

思謙

嵐外

葛三

玉珂

浦の秋朝日は出るもあはれ

枯きく乃禁あるべしとあるの

数鎖や用いるおぼろきく

芽柳のむかしあるの式

旅人とゞめたるの名尻うち

徐来

来之

石年

方解

雉啄

下総

ふりはけやにわかに雲の多

ねぶまるや秋の風

雨塘

双樹

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

さゝまくや煙よもうる夕つゝみ　太笏

松風を出てうそぶくや雲の波　恠丸

淞芽生や森をいでたかうや　兄直

八月やまねよ起すてもいるもの　拙翠

孫楚が枕をむしろ誰そや　融州

すゝ払ふ窓をこみ出なのれる　鶴老

踊まく聲まるまて月夢そて　素迪

かゝしろふそゝて流を放の杖

七人

うつゝ共なき春をふるてゝ枯木これ　維平

木かくしや蕨あるよ峯の小山の月　簑輔

匂くの茶売や花てこゝそさくら　和十

春到て品物すへてあるよ

学ふりまて吟ふ小窓うま　竹人

門口よ雉子あそいるそくまわる道　兎什

下前や茶乃この辻小町五十年　此蘭

盆の月吟ふものゝ数ふる　一聲

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

右耕　茅舎風
兎乙　夢起も郭公一声
巴陵　行くほどの雲も雨意や夏の月
七人
寂阿　いさよひはくれのたくひのいかめしく
一叟　三日雨四日晴天ほとゝぎす
杉長　涼風やまゝのつゝ立鉦叩
安房　親の夢旅寐乃垂乳根ごゝろかな

郁賀　汁の実もものこゝろ橋のかれ
宗拱　汐くみの小舟や春の夕ぐれ
也草　盃をかすめや何そのうつくしき
呂風　夕立やこんなところの甲斐の山
其文　暖き山あいや足袋の土
桃阿　菜のまわや秋もちつく墨の際
輪之

上総
二日魚吉坊こゝまでよひ夫つ

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

行春や笑ひ猫の股　棋柯
舟を出て日を追ふ春の風　野翠

常陸

膳そなの著ころけし苺の花　翠兄
たゝ居てと笑ふる日まを木蓼哉　湖中
笋や蒲あらゝ茹よ蒋粥　遅月
しゝ窓や湖のきしめもの　千万里
朝起しるとも死の日記かな　潟雨

上野

月雪や稗の團子や大播磨　米室
盃や雨を見て居るまゆみ家　月鴻
笋の巣もうなぎなき巣の菴　蘿月

養在深閨人未識

石榴や窓ありけるの宮まうら　根萱
譬の帰眠さをもらけ十團子　朴哉
うらゝ哉に笑ふれの小家哉　玄耕

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

ちの出て人まつするう山ほとゝ

下野

七種の　踊さるまをし

股のよれ犬のおくまやもゝの

山里やわらべやれ梅のまを

華弦の郭霧ル淋しすゝき

きけや世は誉たさん上を下を

信濃

阿弓

雄尾

和井

五雲

魚と岐

魚文

とう敬ふやまつまの葉ル

陽炎やきけすゝきの衣履の紐

きれのまたまもて静まる衣沙多

山の雪ルのよりもを言をゝ

心を師とせることなれと

をもて傳ふのこゝろも

来ル春のかゝ陽をものやう

山ほとゝぎす月乃又やう

素檗

雲帯

武曰

虎杖

如毛

湖光

蕉雨

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

美濃

闇の夜乃あまのまよひ師走かな　千阿

里人いそぐ拝むもふ破の月　楚雀

梅こゝに此筋もよふく猫の恋　良平

寒月のまゝに桐の立枝かな　桃源

数珠玉のまつわれてたはむるゝ　一居

加賀

むら山や比良の法師も夏衣　眉山

朝の雪酢を腥し燕子花　甘谷

あら〳〵や出る日の艶な蚊遣の　万栖

もまの日や蝿もこまるみ生の角　不友

月うらゝたゝく柳しつまり　五葉

越中

菜の花を出て人の青森り　嵐丈

おの〳〵玉帚あわれ　如岡

うら〳〵や海見る人の春の月　大翼

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

名月やちよの亟まよ浪かしこ　基風
秋のくれあるれ小野の友つる　白年

近江

煙こそ立ちのぼれ松風の舞　五來
傘のしたくおもふ夜のあ　千影
田畠のそよぐも見えて秋の月　芳之
両國の竹よ逆まよほとゝぎす　可盈
きぬ〳〵のまゝよ砂ふる戸口の雪　重塊

家鴨ども掛ゝ寄りて探にもぐる　于當
雪の日を菊ハ室薩　志宇

こゝろかのものかきもの

仰雲をみちびくてきた芒　柏翠
十月小春の構この野　五粒
尻すゑて鶯のきもする春日哉　寵山
さゝけ服秋を白波むろれ　文常
山さゝら二人まれさらしま　仙風

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

五月四日於雪耕葬

夕暮や蚊うち喘出してくるる一茶

すゞしいものは赤いてうちん　一瓢

露志それそゝく松の宝哉　茶

筆一本そよ秋ハ来るよ　瓢

月うまの聖ハ泪あるものをきやに　茶

蒲団の下へ草鞋かいこむ　瓢

西念ハ願の西めぐりかな　茶

雨のおもてかゞやかしてる灯哉　瓢

桐のまれ志の玉車を節まで　茶

絡のきの袖をひくによこぎり　瓢

蕎麦切の森党の里よ年ぎて　茶

九くなく雀ハ月ぜ　瓢

召のく　蝉　轟　おのく　茶

しひまと夜しに泊の茅へふと出る　瓢

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

肥後米の買そこなひを笑ふ

人よかくして笠を宇治のく

初霜や茶のをもてくる咲にけり

蒙古退討こゝろの東風

蛤乃ちまめて扁ち大雪寒

よい夢見まする茶ろわらふ

ものてゝ別まは旅ハ止のわる

あゝよとくつゝら乃雪

茶　瓢　茶　瓢　、　茶　瓢　茶

膳棚ハ嵐のこゝろ

二人ゝふるゝ京きぬのに

暮にすけて泳むる

野ゝ山なゝれこゝろをこの

押出ス七里の私ま素湯焚て

南無釈也者あらの

白露の足ゝいつれへさの

伐ことゝれ窓乃

茶　瓢　茶　瓢　茶　瓢　茶　瓢

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

宗旦ゝ末の孫ゟ成ゝ初ゟ
涼山ー〜その家ゟ出ゟ
をゝすめて死るゝ人の
そのすゝ〜記のみゟ
その日ゟ板をゝ彫ゟ
文化八年日書里の
各十八句

歌仙 茶 歌仙 茶 歌仙 茶

すゝさや頼のゝ秋ゟ吹ゟ
たゝ居ゟ二ゟ蛍ゟ袖ゟ
あさ夕の遠山ゟ嵐ゟ
銀河秋一すぢ秋の
青柳のさゝ枝ゟゝ
芳の戸や迹かゝれし秋の
蜩ふくやいかの無尽越やゝに

乙二 冥ゝ巣居 雄淵 百非 人日 文鄰

蟋蟀や　ゆきてかへらぬ人　平角

ほろ〳〵と　蘭女の影よ　きよ女

老ぐらし　花ぞ人まち　雨考

　口あれや　袷肩つき　八着る

三日月を　舎の坂患う　春翠

鼻うごめてくらき　おけ冴つ　旦く

山伏の　聲ぐるま也　山やまと　興人

ゑと　香も桃の〳〵　越き秋の雛　八風

翌日こそと待日もくれ　沾橘

ぬ哀みまて尽ま、酒もまた　北溟

わの京はものみかな〳〵ふ蛙　冥也

もち給ゆ〳〵おく二日延うそ　秋夫

　白うめや何物をいふや

ま、ならやくらまれ蔓のなかるゝ　耋郷

ちそ〳〵ものゝ〳〵てあく秋のあつさ　雞路

松の木乃細くもあるくらす　棠里

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

もろ雲やちろのと島山　桃径

採て起く秋あきものたゝる　乙因

陰のあそび遊ぶくもる筧こゝれ　彦貫

せゝりなきまゝ暁なめと初さゝら　英里

出羽

秋の風おく〳〵ゝ景林うら　長翠

萩芒いろ〳〵の名を枯ゆく　五瓜

雪もやよあの二月うら　成雅

三日月おぼろのしたる時雨うら　野松

鐘を撞ちつゝませてそ蚤拾る　和鳥

佐渡

はいくと杉もの森やそゝの秋　白波

空寺のほつけまあまり蝸牛　可圭

飛弾

夕立のまて人ゝもむ葦のかく　儲史

月よ〳〵と名ぬわて盗む瓢うま　一左

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

哀しみもまきたまふ老ぞう

越後

傘しぬる人のそゝわれあやめ哉　歩蕭

行春や呼ぶやうに泣上戸　宇瓊

紫ロの風のたゝまれ尾をうま　祖明

春社水むつまじく流るゝ　左琴

一片氷心　年眉

涼しさやかくなかちるれうぶ　子功

木がくれて大根のうごくぞう　竹里

一日の菖蒲ふかせる　数の癖　時来

戎吋を蝶してこもや庵の戸　はくと

青柳の影ふむこゝろ成ぞう　喜年

雀よてわるゝやうなり杜の風　由都留

能登

春風やすゝめ吹越す鞠ぞう　茂十

おもふまゝてもの際ありて苧蕎　浮三

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

越前

八月や京の入日を芒の穂　仙草

涼しやと初る早苗りも　友甫

若狭

大根こそよつゐものやふゆごもり

丹波

もちよけてたゆい美のゝ木の本も　武陵

秋い雲のよねろくよわく楓りも　滄洲

夜の衡暮るそしきいなるつる

丹後

六月を雪り初る歟帷子の形　萬籟

十月や殊末端をまれまる鴨　釜山

但馬

りもよ庭いそまいるやや秋のれ　菊莽

遥ゝまであるて楊の日数りも　南飛

因幡

三笑

つまゝて玉蕎麥のあやちこの礼　馬陵

八月のつゐてもし秋のおもりを　梅村

薄雲うり兎の夢や出山まつけ　李謙

伯耆

煤掃ー恋のもつゐりや達の夢　白章

出雲

さりけなきものゝ師走月梨　華叔

夕立や草木もるのるあつの礼　元旦坊

隠岐

紫陽花を咲せよまつる雨乞　豊川

石見

まり水のひろうるかつなく蛙　可成

播磨

警あるまゝ猿も正月小袖うち　玉屑

菊かまてゐつくと日のうの栗　布舟

年たのよまゝかわすれ　花圭

蝸國

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

義作

水仙の一ときそひまさる香

備前　安洲

陽炎に立ちつくまでをみそめ哉

安藝　陶士

膝のとあすめてうやまふ

退すさるも恥ぢ知る麦の穂

あさつゆの這出てまるる蚯蚓哉

竹葉　玄蛙　可友

春ごとや仰ぎのぞむる

家建るそもあふぐ

周訪　路宅　篤老

春ごとや一朱一物ふる雪

峯社月夜ら収屋つる猫うら

長門　天民　鯨牙

待てしばしみちこそなけれ萩のと

雀子や毎日ふる玉ぼ薮のお

羅風　冬蘿

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

冰る夜の斬端よる鏡の夢　橘川

備後

大雪や仰ぐよる陽来て ほるる　寄居鬼

冬の野ゟ冬の月まで出るらるる　岱雨

そまて北雪なる出る月まる　浴蘭

備中

秋地の消重度数屋の匂い　斗外

霧ふて夜のまれよ銀河　蘭香

春雨や ふる夜うる影 京のる　巾婦女

阿波

葬のまる北うまる秋のれ　夷柏

雪を踊てる苗植々の田まれ　蘭秀

伊豫

水ふの掃や植る牛のる　擠堂

夜あるれ雪紙ふ絶てし秋の風　蘭郷

蜱の夜まふふ新屋ふ　遊月

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

雲のうごきは　樹もある里の客　其梅

讃岐

麻の葉こえて歌風たのし　桃里

秋ちかき夜半や　静舟の灯の細り　芝峯

土佐

何やらに風呂焚嶼や朧月　路右

七里あまり雲も見や蘭のかほり　里青

筑前

秋風はおもひかけても月夜かな　此原

手枕草芝乃茎もよもすがら　亀陸

桃の実は葉ずゑも梅もうるむ暑さ　文志

筑後

急ぎ行山もとくれそむ蓑蚊哉　文角

月の影よき程なる柳の糸　官柳

小庇いつくしあれなむやめ子供り　駱北

おさけとうめの木たてくるま作り　銭舟

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

水多き方へ流れて日ハ永し　石狗

紀伊

薄や魚追ふ獺よ根をたゝれ　塊亭

伏水の陶蛙を築山よりおきて　〃

這いてくるものもあるよ月雨　糸九

豊前

潮ハ真のかよひいて鹿の声　如柳

祖師の忌のそふ九菓汁や白つゆ　木父

淡路

湖すてゝゆく鳥や芝の色　青城

うつむきをもたぬ宿もれ冬牡　五陵

ものゝるゝやうて赤あるれ嵐　冬柱

豊後

門を出ハあまたの人の雁のこゑ　月代

火ともし頃ハ二度の衣かへ　真澄

掛取の底よりあるものおすみ　霞城

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

是ゝら近江の海そ多舞ゝ

萩芒朝のうをもる圭不二の形

等社事ゑ日ゝし牛のたゝあゝうら

日向　　蓼亭

大こゝろ月ゆゑそゝ薬含ひ　　羅川

冬のむ社着りゝて時雨哉　　尚故

水をゝて誰ゝ教ゝ朱ぬゝ　　圃友

哉をゝまゝちまもやまのゝへ　　有筐

蝸牛

水書ゑはゝその下壱ゝ雨古多　　蘆笛

肥後

紙帽ゝて垣のゝ社ゝゝまれ　　對竹

桐のゝ乳ゆゑ華動ゝす物ゝ降　　如凡

降ゑゝ後たゝ陰出勢社のゝれ　　瑚璉

肥前

今更ゝ母萩なゝ枯尾も　　菊也

さゝゝゑゑのゝ梢のゝ　　祥采

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

皆よみ秋をさのハつのまも
一井戸松汲もち町やく盆の月
もゝみ白皆消よそうの山

大隅

春のゝ野猟治う商をあるもの
古皆をうけてもし出さやまもらく

壹岐

鍾倉や小除ものをなく鶉

鞍風
南無
天外
雅松
万川
紅雪

對馬

ちハすゝわして神もろやく菜摘
ほゝるゝ乃や向六ゝう栗の米原

薩摩

生ゝもしものの小巡そ未立
八重津彩いあやあの日をあるもの
にうまでありきのなけよそう豹
おしくて雪の戸松押ゆるり

九魯
曙堂

関叟
琴洲
巴水
一翁

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

あまた人と同じく花を山の色すてゝ
もゝき物見塚よりくる秋主人一夢の
草をゝそれるみくゝ称と共
膝のよりあるそこ家
走り咲萩やほつちの灯ちらゝる　一歌
薄ふるゝ都るもおほ住の月　成美
霧の陣船よ小舟のすりあけて　久滅

参ふもゝき椎のもとれ　諫圃
もゝくゝを藁ふたる風車　袁丁
泊をそひくゝなりし乃園　歌
大亀松茸上赤ゝ人ゝ美　美
山ふき内侍よゝをゝわて　滅
えひゝふを小河ひゝ越ふそ　圃
草のいまゝや苔桃乃時　丁
風の神這ゝあゝ陵ゝに　歌

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

かうさく肩をならべ宿うら
もるに破れやうくも茅よ葺て
たゝいの底はそれをたゝみ名月
栗寺は縄をひきる坂の上
をおもいてもうすひ日
某憂なの中まて初ひまて
まうひ法度をもしむ比日
一瓢四　成美四　久減四　諫圃三

美　成　圃　丁　瓢　美　成

表丁三

草庵四時

小まつけ松雑ふと姉ちの墓遠う
朝めしに思菓をいつくのと
夕月いの雪ふるまとを乃門
おちてもふ松のつゝ赤葉
堪大のそわう次を極楽の

一瓢

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71
ガラス使用

帝國圖書館

こんとう人生命の日記を志たてそのまゝにのこしはてゝ中世行迹もよるまち記乃名の世にいとひてうかる山里よりもとめ出ぬ人とこれるまち記ものあるうちにたつぬるまち記をひらくも去、我ものをなとすめまくおもふ

君れ有みおもの〻ふる紀まて紫蘭の香にひこの君植のこの枝よろこぶあるたるまれよ昔のこゝろ人につまこう我面よ若詞まち記ひなまこのかたみの俤の杉入道う葉にそひやそこ人はう紀なひ我まちたるまち

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』 請求記号 863-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

ガラス使用

863
ニ部
71

14141

換おもちゃ

隨齋寫

国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『物見塚記』　請求記号 863-71